

授業リフレクションを通じた教師の成長 —強いこだわりを持った現職大学院生の変容 (3) —

道田泰司 (琉球大学)

キーワード：教職大学院，教育観，手立ての変容

現職教師は、どのような経験を経て考え方を変容させ、力量を形成しているのであろうか。本研究では、教職大学院で (1) 研究課題の深掘り (道田・岩谷, 2019 教心), (2) 授業の見方の変容 (道田, 2019 日心) をした現職院生が, (3) 2 年目の実習を通して授業に対する考え方・教育観を変容させた事例を報告する。

方 法

インフォーマントは教職歴約 20 年の中学校家庭科教師。4～11 月の 21 回の授業について、実習日誌・参観した大学教員のリフレクション記録を中心として、補足的にインタビューを行った。それらから、どのような問題がリフレクションの対象となったかを抽出・整理し、その問題が、どのように解消されていったか、それを通して教師がどのように変容したかについて検討した。また 2 月に 1 度、フォローアップ的参観を行った。

結果と考察

初日 (4/12) の授業後のリフレクションで問題になった、授業参加、意味ある活動、気になる生徒の 3 点を中心に、その後の実践の模索が行われた。

気になる生徒 以前は不適切な行動を咎める、高圧的にやらせる、などしていたが、生徒には生徒なりの事情があると考え、できることを見つけて増やしていくようになった。この変化は、大学院で「まずはやってみる」スタンスを学び、生徒を個別的に見て声かけを工夫したときに、生徒の反応が変わることを実感したからだという。

授業参加 5 月に不参加生徒を見落としていた。それを指摘され、全員の参加確認を心がけたが、ビデオで見落としに気づいたり、全員参加の雰囲気を作れたり一進一退であった。9 月調理実習でも、エプロン着用を適切に促せる場面もあれば、不参加生徒に効果的でない声かけを行う場面もあった。ただし授業参加の問題は、2 月フォローアップ観察時には解消されていた。対象教師は以前は、生徒は求められたことをやる前提で授業を進めていたため、丁寧に参加確認・促しを行っていなかった。それが、どのようにしたら動くのかを考えるスタンスで授業を行うようになっている。

意味ある活動 活動内容や活動方法など様々な模索を行っていたが、ここでは役割付与について検討する。4 月、班活動に参加しない生徒がいたため、5

月から全員に役割付与したが、役割が機能しなかったり個人作業になったりした。7 月の実習時、班長を集めて指示していたので、そのやり方を中心に据えたところ、生徒同士のフォローが増え、教師の声かけが激減した。10 月以降、テスト解答時なども役割を活かして生徒に委ねる工夫を行っている。役割が意味あるものとして機能し始め、対象教師なりの活かし方が生まれている。対象教師は以前は教師主導の授業が中心で、たまにジグソー学習などを取り入れていたが、あまりうまく機能していなかった。それがこの経験を通して、型から始まるのではなく、生徒の実態を把握し、生徒に合わせた授業づくりを心がけるようになった。以上の経験を経て、1 学年の教科開き (11 月) でも 2 月フォローアップ観察でも、役割を活かして全員参加の雰囲気をつくり、生徒間の様子を観察してその後の授業方針を考える授業スタイルに変容している。

教師の変容 対象教師の授業がこのように変容した背景には、生徒観・授業観→生徒の見取り方→手立ての変容がある。1 年次実習で、今までなら「この子はしょうがない」と捉えていた気になる生徒への声掛けを変えたところ、行動が変化した (道田, 2019 日心)。これをきっかけに、「予め決めた授業をこなす」意識から、「生徒は変わりうる」という生徒観に変容したという。ただし、俯瞰的に個々の生徒を見取ることは、9 月までは難しい面もあった。実習日誌にも、6 月までは気になる生徒の記述が多かったが、7 月からはそうではない特定生徒の記述や、各班の様子が記述されている。生徒の様子をよりいねいに見るようになっており、それを通して生徒理解が深まり、意味のある活動や効果のある手立てにつながったと考えられる。

以前の対象教師は、教師主導で、教師が決めたことを中心に授業を行っていた。生徒も漫然と見るか気になる生徒を中心に見る見方であった。それは数回の関わりでは変わらない。これまでの方法や授業観、見取り方へのこだわりがあるせいであろう。大学教員とのリフレクションやビデオリフレクションを繰り返し、長期にわたる試行錯誤が必要であり、生徒観・授業観の変容、個を中心とした見取りへの変容があって、効果的な手立てにつながるといえる。

付 記

本研究は科研費 (16K04306) の助成を受けた。